



多様化する雇用環境で活躍する 人材のエキスパート 国家資格、キャリアコンサルタント

キャリア形成の支援が重要

みなさん、キャリアコンサルタントという資格をご存知ですか？キャリアコンサルタントは職業能力開発促進法に基づく国家資格で、どのような活動をするのかというと、「キャリアコンサルティング」を行うわけですが、キャリアって？コンサルティングって？そのような人も多いかと思いますが、今日は「キャリアコンサルタント」について、プロオフィスキャリアクターの「プロ子女史」を先生として、枚方つーしんキャラクター「ぼしひこくん」との会話形式で見えていくことにしましょう。



○キャリアコンサルタントとは？

ぼしひこ (以下…ぼ)
「もー辞めたる！」
プロ子 (以下…プ) 「急にどうしたの？」
ぼ「ひらつーって人使い…いや星使いが荒すぎて」
プ「人気者なら良いじゃない」
ぼ「おりひめちゃんに会いに行かれへん！」
プ「じゃあキャリアコンサルタントに相談してみたら？」

ぼ「キャリアコンサルタントって何？強そう！」
プ「相変わらず能天気ね…じゃあ説明してあげましょ」

ぼ「…どういうこと？」
プ「例えば今の職場でキャリアアップしたい、転職したいけど必要な資格がわからない、就職したいけどそもそも何がしたいのかわからないとか、つていうのは



働く時には切っても切り離せない問題よね」
ぼ「自分がどんなことが得意で、どういう仕事にしたいのかってこと？」
プ「そういうこと。自分の適性や能力、関心、社会や企業内にある仕事について理解することとができれば、その中から自身に合った仕事を主体的に選択できるようにするでしょ？」

ぼ「それを客観的に理解できたら仕事の選択肢も増えそう」
プ「希望するキャリアの実現にはすごく重要な情報だと思うわよ」
ぼ「俺はスターやし照らされるだけの『月』として働くのは嫌やな」
プ「それはそもそも形式的に無理があるけどね」



プ「そう、そこでキャリアコンサルタントは求職者の相談内容から問題を共有、明確化して、相談者が問題解決への気付きを促し、最適な判断、行動ができるように助言及び指導（支援）を行うのよ」
ぼ「働く人を応援する専門家つてことか」
プ「社会が多様化している中、情報の取捨選択はとて難しいから、その中で、求職者のキャリアと企業の希望する求人の相互利益とミスマッチを防止、橋渡しをするような役割ね」

キャリアコンサルタントの必要性

プ「社会環境の変化により、雇用環境も多様化してきているでしょ」
ぼ「最近よく聞く働き方改革とか？」
プ「そう、国の政策として労働生産性の向上を進めていく中で、適切なキャリアの実現は必要不可欠よね」

ぼ「自分に合っていない仕事やったらやる気出ない」
プ「そう、そこでキャリアコンサルタントは求職者の相談内容から問題を共有、明確化して、相談者が問題解決への気付きを促し、最適な判断、行動ができるように助言及び指導（支援）を行うのよ」



ぼ「ぼしひこつて言うねん、今日はよろしく！」
吉田 (以下…吉) 「初めまして！ (星…)」
はい、人材プロオフィス静岡営業所所長 吉田と申します」



有資格者へインタビュー

ぼ「早速やけど吉田さんがキャリアコンサルタントの資格を取得した理由ってなんなん？」
吉「キャリアコンサルタントが国家資格になったのを受けて、養成講座を人材プロオフィスで受ける流れになり、取得しました」
ぼ「資格を取得した意味って何なん？」
吉「基本的には日常の業務の内容と同じなのですが、改めてキャリアコンサルタントの知識が増えたことですね。漠然と行っていた業務の意味や方法論を再確認できたと思います。」



ぼ「キャリアコンサルタントがいる会社に相談するメリットって何なん？」
吉「私が一番大きいと思うのは、意欲があるが何を良いかわからないといううような、現在埋もれてしまっている新たな人材を発掘できることですね。人材の取り合いで人手不足になっている企業様にも求職者にもそういった面でのメリットは大きいと思います」
ぼ「ゼロから人材が増えるつてことやもんな」
吉「そうなんです、求職者それぞれの希望や意思に合わせて、まずはキャリアへの意欲を向上させることが重要で、それがミスマッチによる企業からの人材流出を防ぐことにも繋がると思います」
ぼ「じゃあズバリ聞くけど俺に向いてる仕事って何やと思う？」
吉「や…やつぱりその…光輝く枚方のスターじゃないでしょうか」
ぼ「やつぱりかー！流石わかつてるな！」
吉「良かったです…」

人材プロオフィスでは現在3名のキャリアコンサルタント資格取得者が在籍し、企業と求職者のサポートと共に、採用のご相談に乗らせていただきます。お気軽にお問合せ下さい。

「松宮さんと出会わずに就職していたら、私は仕事で辛いことにおつかれば、現実から目を背けて逃げ出していたと思います。『働く』ことをシンプルに考えればいい」と思っていたのは、現実に向き合わず、考えることを放棄することだった…」
大学の就職支援センターは今日も学生で賑わっていたが、フロ子にはその喧騒は耳に入らない。それは話を聞く松宮も同様だった。「私は今日から考えることにキチンと向き合います。辛くてもわからなくても考えることから目を背けません。それが私にとって『働く』ことの大きな一歩です。なので、松宮さん、色々私に教えてください」
松宮は下を向いて大きく息を吐いてからフロ子を見た。その顔は初めて会った時とは別人のように柔和な顔だった。「これだから学生さんは面白い、そして素晴らしいです。私もあなたの就職について真剣にお手伝いさせていただきます。一緒に頑張りましょう」
「はい！」



「その腫らした目でよくお越しくださいましたね。ただ、就職の面接では印象悪いですが…」
嫌味混じりの会話でフロ子を迎えた松宮だったが、言葉とは裏腹に、表情には笑みが浮かんでいた。
「で…一晩自分と向き合ってた？」
「…辛かったです」
「…でしようね」
「ただ…」
「ただ…？」
「これから『現実から目をそらさないこと』を決めました」
フロ子は真つ直ぐに松宮の目を見て答えた。「今の自分には何も無いのも現実ですし、これまで深く考えてこなかったことも現実です。でも私にはここから改めてスタートするしかないのも現実なんです」
松宮は黙ってフロ子の言葉を聞いていた。



【前回のあらすじ】
何もない自分の現実を突きつけられた就職活動中のフロ子。泣きはらした翌日、フロ子は大学の就職支援センターの松宮の前に再び座っていた。